

豊川1遺跡

ノーザンファームトレーニングコース造成工事立会報告書

厚真町教育委員会

平成13年3月

例 言

1. 本書は、ノーザンファームトレーニングコース（坂路馬場）造成工事に伴う、豊川1遺跡の工事立会調査報告書である。
2. 本書の編集は、北海道教育庁文化課の田才雅彦が担当した。
3. 第I章第1節～3節を長橋政徳が、その他は田才雅彦が執筆した。
4. 遺物の水洗・注記・実測・写真撮影及び図版作成は、(有)宮塚文化財研究所に委託した。遺物の図は縮尺2分の1に統一してある。
5. 調査記録・出土品は厚真町教育委員会が保管する。
6. 調査に至るまでの段取りや、現場・整理作業に当たって、次の機関及び人々から多大なご協力をいただきました。記して感謝いたします（敬称略）。

ノーザンファーム：菊池勇次郎 菅原秀雄 工藤展也 堤産程 長橋俊雄
漆坂由則 楠木英仁 福村竹夫 佐々木光男 内田昌利
田名部啓司

(株)尾崎測量設計事務所：斉藤 豊

三菱建設(株)：沼田芳宏 鈴木 敬

苔重建設(株)：武田昭広 斉藤俊之

フジタ重機(株)：藤井新一 所勝芳 本間雅宏 高間順子 原伸一

阿部邦彦 吉原一晴

目 次

I. 調査の概要	
1 調査要項	1
2 調査体制	1
3 調査に至る経過	1
4 遺跡の立地と周辺の遺跡	2
5 調査範囲と調査の方法	6
6 層序	6
II. 遺構と遺物	
1 遺構	7
1) 竪穴住居跡	7
2) 土壇	7
2 遺物	9
1) 土器	9
2) 石器類	13

I. 調査の概要

1 調査要項

事業名 ノーザンファームトレーニングコース（坂路馬場）造成工事
委託者 吉田勝巳
受託者 厚真町教育委員会
遺跡名 豊川1遺跡（北海道教育委員会登録番号 J-13-71）
所在地 北海道勇払郡厚真町字豊川21・23
調査面積 6,624m²
調査期間 立会調査：平成12年10月31日～11月4日
整理期間：平成12年12月1日～平成13年3月31日

2 調査体制

調査主体者	厚真町教育委員会	教育長	幅田 敏夫
		生涯学習課長	長橋 政徳
調査員	北海道教育庁文化課	主査	千葉 英一 田才 雅彦
	同	主任	西脇対名夫

3 調査に至る経過

ノーザンファーム代表の吉田勝巳氏は、競走馬育成用の坂路馬場造成予定地における埋蔵文化財保護のための事前協議を、平成12年5月30日に厚真町教育委員会へ提出した。

厚真町教育委員会は、予定地及び周辺に周知の包蔵地は確認されていないが従来調査の手が加わっていない地域であることから、所在調査が必要の旨を意見とし北海道教育委員会へ進達した。

6月1日に行われた所在調査では更に試掘調査が必要とされ、7月13・14日に重機を使用した試掘調査が実施された。

試掘調査では、図2のST160L15とST280L10・300L8で土器片や礫が出土し、同図の舌状部一帯が豊川1遺跡として台帳登録された。

ノーザンファーム・北海道教育委員会と埋蔵文化財包蔵地の取扱いについて協議を行った結果、ST160～ST320のうち切土工事が行われる範囲について工事施工に際し調査員が立会し必要な調査を行うこととなり、7月26日付文書で北海道教育委員会からノーザンファーム吉田勝巳氏への回答及び町教育委員会への通知があった。

調査は厚真町教育委員会が主体となって行うが、町に調査が可能な専門職員がいないため、調査員については北海道教育委員会の協力を仰ぎ、作業に必要な重機・作業員についてはノーザンファームに提供していただくこととした。

立会は工事の詳細設計及び調査員の日程調整等を経て、千葉・田才両調査員によって10月30日から11月2日の予定で始められたが、大型住居跡が検出されたため西脇調査員の応援も得て、11月4日に終了した。最終的な調査範囲は、図2に示したとおりST160～ST370の間で切土になる範囲6,624m²となった。

最後になりましたが、この工事立会はノーザンファーム吉田勝巳氏の文化財に対する深いご理解と、調査員・作業員の祝日返上の調査より終了できましたことを心より感謝申し上げます。

4 遺跡の立地と周辺の遺跡

本遺跡は厚真町市街の西約4km、安平川と厚真川に挟まれた丘陵の南端近くに張り出した小舌状部に位置する(表・図1-1)。標高は20~30mで、現海岸線との距離は約11.5kmある。南側は、南北に連なる小丘陵列を中央に擁する勇払原野が広がり、北は遠く日高山脈に至る尾根筋が続く。

本遺跡周辺は樽前山火山灰の堆積が厚く、また山林で原地形が保存されている範囲が広いことから、昭和28年に結成され町内の遺跡踏査を続けていた厚真町郷土研究会も、僅か2カ所(表・図1-2・3)の遺跡を確認しているのみであった。しかし、昭和48年から行われた苫小牧東部開発事業関連の分布調査で、開発予定地及び周辺の丘陵縁辺部から圧倒的な密度で遺跡が確認された(表・図1-4~25ほか計116遺跡)。これらの遺跡は標高10~25mの低い丘陵部に位置し、縄文時代早期から近世アイヌ期に至る各時期の遺構が確認されている。このうち発掘調査が行われているのは苫小牧市・厚真町の34遺跡で、これまでに5冊の報告書が刊行され、国指定史跡となった静川遺跡を含む残りの遺跡については平成13年度中に報告書が刊行される予定である。

表1及び図1に示した範囲の遺跡を概括すると、主体となるのは縄文時代中期で、25遺跡中17遺跡で遺物が出土している。苫小牧市美沢4遺跡(標高15~24m、隔海距離約10km)や千歳市美々貝塚(標高20~24m、隔海距離約17km)でヤマトシジミが主体となる貝塚が形成されているように、縄文時代前期には縄文海進が最も進み、標高10m以上の段丘縁辺部が直接海を見下ろす環境にあったことがわかっている。本遺跡および周辺の遺跡群も丘陵縁辺の標高10~30mに位置しており、縄文時代中期を中心に、海進と海退に沿って海岸沿いの高見を選地していたことが窺われる。一方、続縄文時代以降の遺跡が減少するのは、海岸砂丘の発達にともない浅海であった部分が後背湿地化し、本遺跡周辺の丘陵部が生活適地としての環境を失ったものと考えられる。

なお、厚真川下流域の遺跡については、同時刊行される鯉沼2遺跡の立会報告書を参照されたい。

表1 豊川1遺跡と周辺の遺跡

番号	管内	名称	標高(m)	時代・時期					続縄文	擦文	備考
				早期	前期	中期	後期	晩期			
1	厚真	豊川1	20~30				○	○			本報告書
2	〃	本郷2	15~25					○			
3	〃	美里1	15								縄文
4	早来	源武8	16			○		○			
5	〃	源武10	16								縄文
6	〃	源武4	16								縄文
7	〃	源武9	16			○					
8	〃	源武3	16			○		○			
9	〃	源武7	16	○		○					
10	〃	源武5	14	○		○			○		
11	〃	源武6	16	○		○					
12	〃	源武2	14	○		○				○	
13	苫小牧	長橋	12~14			○					
14	〃	吉田	15			○					
15	〃	吉田2	15			○					
16	〃	吉田3	15			○					
17	〃	矢幅	12~14			○		○		○	
18	〃	静川12	12~14					○			
19	〃	静川13	12~14			○		○			
20	〃	静川11	12~14		○	○	○				
21	〃	安藤沼1	10~14			○	○				
22	〃	佐伯	12~14	○	○	○	○	○			
23	〃	山岸	10~14		○						
24	〃	山岸2	10			○		○			
25	〃	奥井西1	12~14		○						

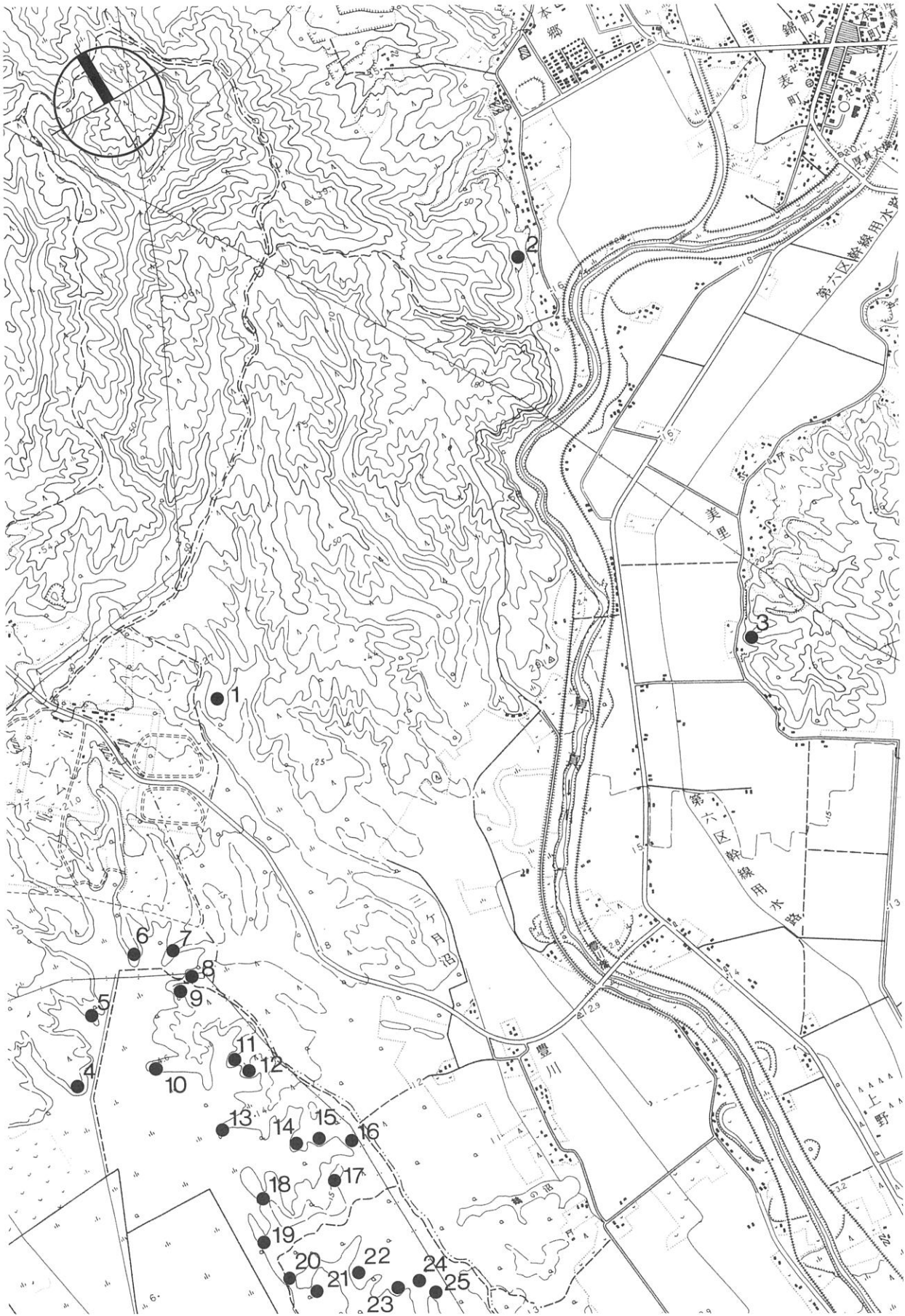


図1 豊川1遺跡と周辺の遺跡 (1/2.5万厚真町管内図を使用)

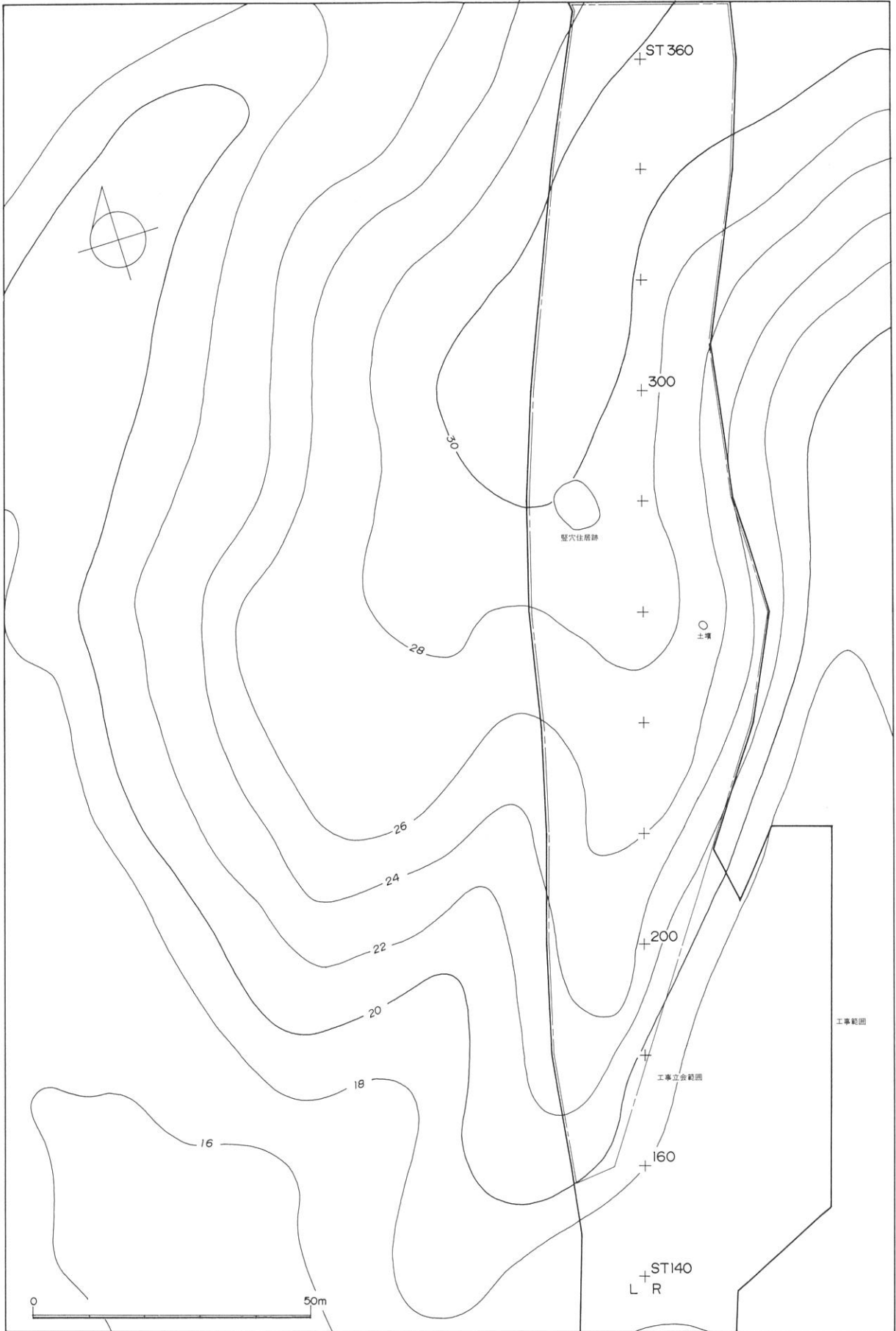


図2 調査区と地形 (コンターは表土層上面)

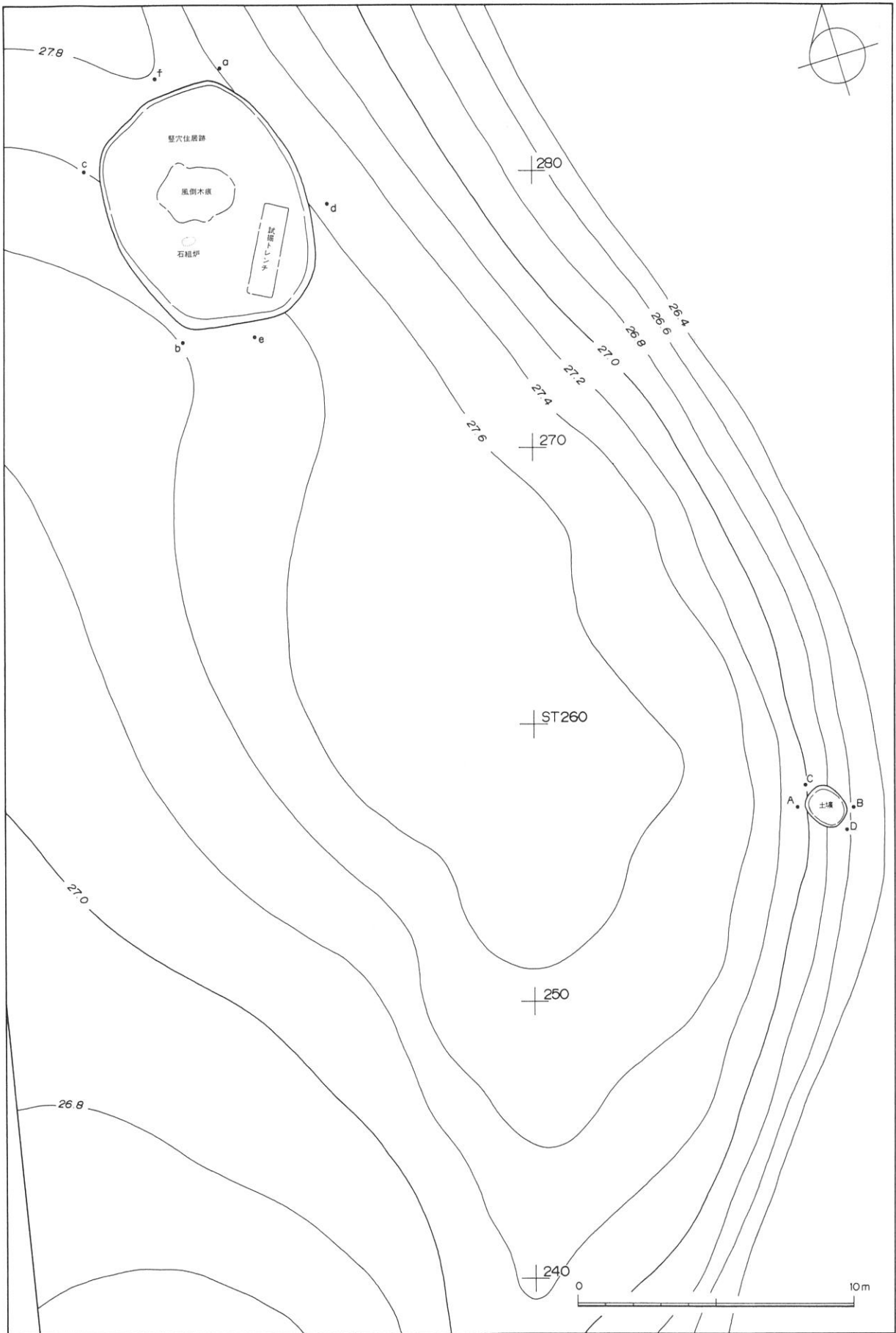


図3 遺構の位置 (コンターはT a-d層上面)

5 調査範囲と調査の方法

調査は、あらかじめ掘削対象範囲の表土及び樽前b火山灰が除去された後に開始し、丘陵先端側のST160付近から基部側にむけ行った。当初予定はST320までであったが、ST280付近で竪穴住居跡を確認したため、念のため舌状部の基部までを対象範囲に加えることとし、ST370までの6,624m²を最終調査範囲とした。

調査の手順は以下のとおりである。

- ① II a 層上面の遺構有無を確認（遺構なし）。
- ② II a 層の黒色土を0.7m³バックホウで削り、堆積した黒色土中の遺物確認を作業員が行う。
- ③ 樽前c火山灰層上面での遺構有無確認（遺構なし）。
- ④ 樽前c火山灰除去とII b層上面での遺構有無確認（竪穴住居跡1軒確認）。
- ⑤ II b層の黒色土を0.7m³バックホウで削り、堆積した黒色土中の遺物確認を作業員が行う。
- ⑥ 樽前d火山灰層上面での遺構有無確認（土壌1基確認）。
- ⑦ 遺構確認部分のコンター図作成。
- ⑧ 遺構調査。

6 層序（図4）

立会時には土層断面図を作成していないため、試掘調査時の柱状図を掲載した。土層注記は以下のとおりである。

I：森林表土。分解途中の腐植土が主体で暗褐色を呈す。

Ta-b：樽前b火山灰。1,663年降灰の白色粗粒火山灰。層厚は80cm前後ある。

II a：黒色土。縄文時代晩期後葉以降の遺物包含層相当層。今回の立会範囲では遺構・遺物は確認していない。10～30cmの厚さがある。

B-Tm：朝鮮半島付根の北にある白頭山（2,744m）を噴出起源とする火山灰。10世紀半ば降灰。

II a層中に厚さ数cmのレンズ状堆積でみられる。本地点では淡い黄橙色を呈する。

Ta-c：樽前c火山灰。約2,500年前降灰の白色粗粒火山灰。10～40cmの厚さがある。

II b：縄文時代晩期中葉以前の遺物包含層。10～40cmの厚さがある。下半部分はTa-d層に浸透し、層界が不明瞭になっている部分がある。

Ta-d：樽前d火山灰。約8,000年前降灰の橙～赤褐色粗粒火山灰。

En-a：約18,000年前降灰の黄褐色粗粒火山灰。

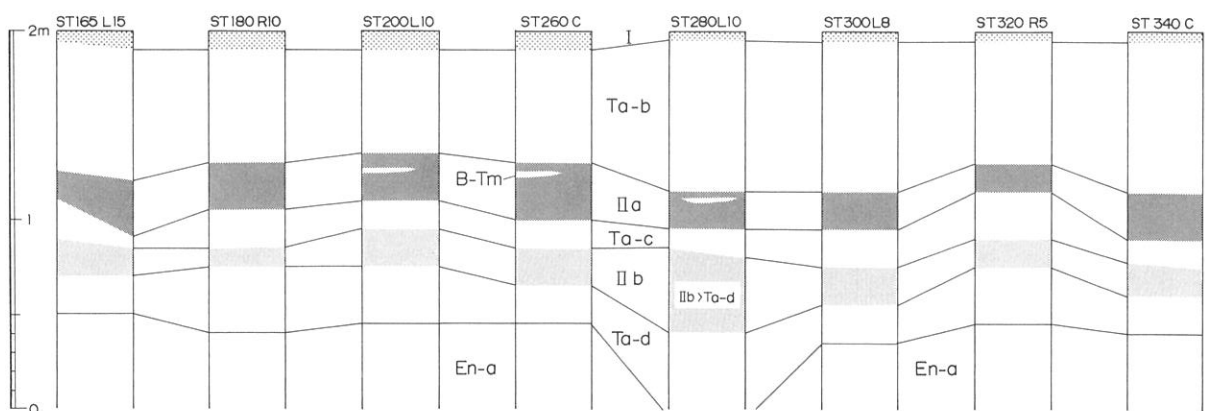


図4 土層柱状図

II. 遺構と遺物

1 遺構

1) 竪穴住居跡 (図3・5, 図5は1/80)

ST280L10周辺のIIb層上面で、樽前c火山灰の楕円形落ち込みを重機オペレーターが確認した。その範囲は南北5m、東西4mほどであり、竪穴住居跡のくぼみと判断して調査を行った。なお、この地点は試掘調査時にトレンチを入れており、その時に竪穴住居の床面を掘り抜いているにもかかわらず遺構と認識できなかったため、関係各位にご迷惑をおかけした点を初めにお詫びしたい。

火山灰を除去した後、十字に土層観察用ベルトを残して調査を開始したが、当初の予想を上回る規模の大きさであった。

平面形は、四方向とも中央部が外側に張り出すやや歪んだ楕円形を呈する。ほぼ南北方向を指す最大長は8.6mを測るが、東西の辺の長さは、西側の6.4mに対して東側が7.6mと長い。短軸方向の最大長6.8mを測る。床面積は約46.8cmである。床面は水平でなく、北側から南側に傾斜がみられ、南端が北端に比して30cm程深い。

床面中央部に大きな風倒木痕がみられる。周囲の床面はその影響でかなり動いており、遺物も風倒木痕の盛り上がり上や黒色土の落ち込み内に移動しているものがみられた。覆土上面の樽前c火山灰の堆積状況にこの影響が認められないことから、竪穴廃絶後に生えた木が樽前c火山灰降灰前に倒れたことがわかる。

中央南西側に炉跡がみられ、その中に土器片や焼けた礫がまとめて残されていた。竪穴内で土器片が出土したのは炉内だけであり、竪穴を放棄するときにまとめて置いていったものであろうか。

柱穴の可能性のある黒色のシミについては、全て半截して確認を行ったが明確に柱穴と判断できるものはなかった。

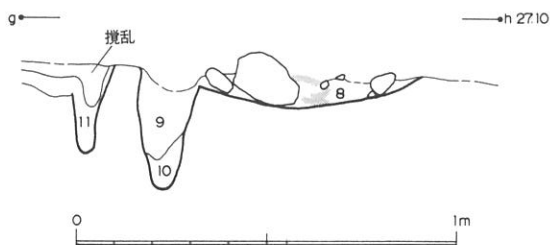
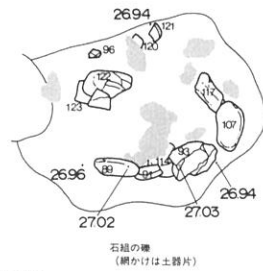
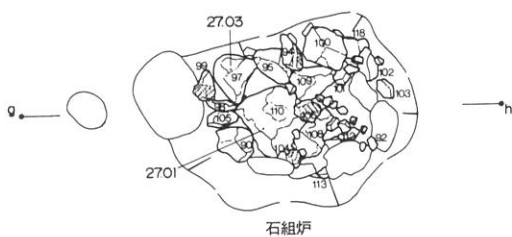
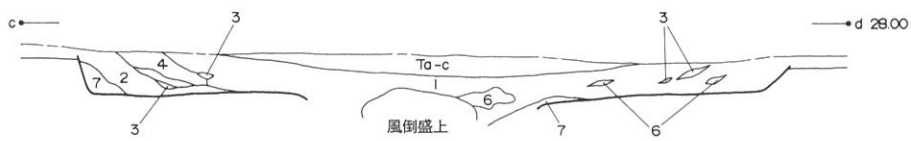
竪穴の掘り込みはIIb層中にあるが、周囲に掘り上げ土の広がり認められず、また遺物の分布も確認していないことから生活面及び掘り込み面は確認できていない。

この時期の竪穴住居跡としては、厚真7遺跡(工藤肇ほか 1987)、苫小牧市静川遺跡(佐藤一夫ほか 1983)、同タブコブ遺跡(佐藤一夫ほか 1984)が知られている。タブコブ遺跡では17軒の竪穴住居跡が調査され、大型(10×7m)でベンチを有するもの(A型)1軒、4×3m前後と小型のもの(B型)7軒、3×2mほどと更に小型のもの(C型)8軒に分類されている。今回調査した竪穴住居跡の規模は、前述したとおり8.6×6.8mと上記分類のA型とB型の間に位置し、平面形や中央やや西側に炉を設ける点などはタブコブ遺跡のHP-14(5.5×3.5m)に共通する。なお、タブコブ遺跡報告書のFig.99をみると、石組炉の中や上面にも礫と思われる遺物が描かれており、この点も今回調査した竪穴住居跡との共通項と言えよう。

2) 土壌 (図3・6, 図6は1/40)

ST260R10付近(傾斜変換点付近)の樽前d火山灰層上面で、楕円形を呈する土壌1基を確認した。長軸は北西-南東方向で、確認面の長径170cm、短径130cm、壙底面の長径135cm、短径115cm、深さは最大50cmを測る。埋土は暗赤褐色土(樽前d火山灰>II層土)が主体で、上部に樽前c火山灰の流れ込みが見られる。出土遺物はない。

壙底中央の北西側に、1cm四方足らずの白っぽい杵状の痕跡4個が並んでみられた。ヒトの奥歯のエナメル質が残っていたものと思われるが、取り上げできなかったため詳細は不明である。



竪穴住居跡土層注記

- 1 覆土の主体を占める黒色土。樽前d火山灰を含むIIb層。
- 2 暗褐色土。暗黄色の樽前d火山灰を含むIIb層。
- 3 黄褐色土。暗黄色の樽前d火山灰を主体としIIb層を含む。
- 4 黒色土。樽前d火山灰の赤色粗粒を含むIIb層。
- 5 黒色土。混じり気なしのIIb層。
- 6 暗赤褐色土。樽前d火山灰の赤色細粒を多く含むIIb層。
- 7 赤褐色土。樽前d火山灰の赤色細粒が主体でIIb層を含む。
- 8 黒色粘土質シルト。炭化物を含む。
- 9 黒色粘土質シルト。
- 10 黒色粘土質シルト。樽前d火山灰混じり。
- 11 黒褐色粘土質シルト。

図5 竪穴住居跡

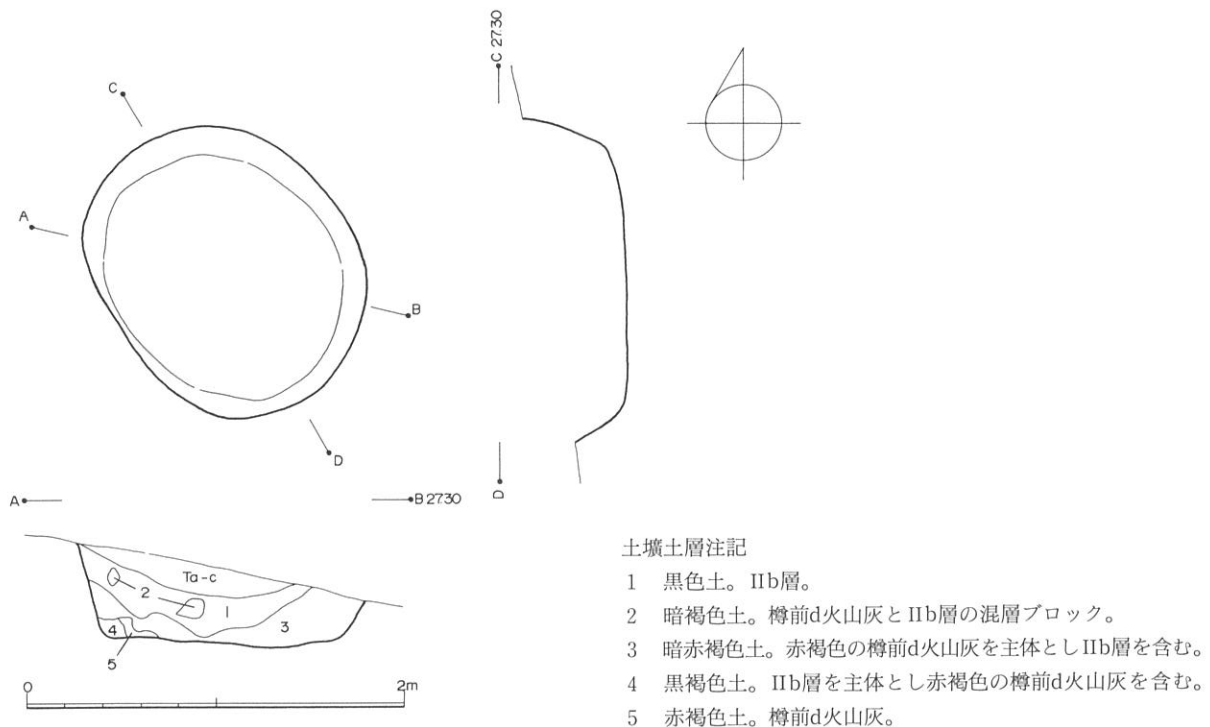


図6 土壌

2 遺物

遺物総数は288点で、竪穴住居跡関連が239点、包含層出土が49点である。土器・石器にわけて出土状況別に記載する。なお、図7～12の縮尺は2分の1である。

1) 土器 (表2・3, 図7・8)

竪穴住居跡関連では石組炉内に39点が残されているのみで、床面や覆土中から1点も出土していないのは特徴的である。

石組炉内の土器は接合の結果12のグループに集約された。図7-1～10は同一個体と思われる。LRとRLの縄文原体を横回転させた羽状縄文を地文とし、幅1.2～2.0cmのバンドをめぐらせた上に縄文を施文している。内面は丁寧にみがかれている。色調は内外とも暗黄～灰褐色を呈し、胎土には径1～4mmの小礫を多量に含む。余市町大谷地貝塚(乾芳宏 1998)出土の第Ⅲ群土器c類(余市式)に相当する。

11は、器厚が2.0～3.0cmに達する底部近くの破片で、底部内面は丸底状を呈する。胎土は礫が少なく黒雲母が目立つ。縄文原体が細く、内面はみがきが施されていない。1～10とは別個体の余市式土器である。

包含層からは15点が出土している。地点別には、調査区南端のST160L10で1点、ST280付近で3点、ST300Cで11点である。なお、包含層の遺物は基本的に10mメッシュ単位で取り上げているため、出土地点ST300Cは基点から300mのセンター杭を中心とした範囲から出土したものを示している。また、ST280と300で把握できたものは5mメッシュで示している。

図8-1～9は綱文式で、いずれも胎土に繊維を含み、内面はみがかれている。1は横走る条の太さが0.7cmと今回出土した中では最も太い。器厚は1.3cmで、色調は外面が褐色、内面は灰褐色を呈する。2は内外面とも灰褐色を呈する口縁部片。口唇は上から押さえられるように整形され内側が角張り、外側に張り出す。文様は右下がりの条で太さは0.4cm。胎土に繊維を多量に含み、繊維部分からの剝落が目立つ。器厚は0.9～1.2cm。3・4は2と同一個体と思われる。器厚は1.2cmで、繊維部分からの剝落が目立つ。色調は外面が灰～赤褐色、内面が灰～灰黄褐色を呈する。5～8は同一個体と思

表2 竪穴住居跡石組炉内出土土器

No.	分類	標高(m)	点数	図番号	遺物番号	備考
1	余市式	26.93	1	7-1	99	接合 器厚1.4~2.1cm
		26.90	1		116	
		—	1		137①	
2	余市式	27.00	2	7-2	108③	接合, 器厚1.5~1.7cm
3	余市式	27.00	2	7-3	108①	接合, 器厚1.6cm
		27.00	1		104①	
4	余市式	27.02	1	7-4	106	器厚1.5~1.7cm
5	余市式	27.00	8	7-5	108②	内2点接合を図示、表面剥落
6	余市式	27.00	1	7-6	94	器厚1.7cm
7	余市式	26.99	2	7-7	103	器厚1.4~1.5cm
8	余市式	27.00	4	7-8	108④	接合, 表面剥落
		26.98	1		112	
		—	1		126⑤	
9	余市式	26.98	2	7-9	118	表面剥落
10	余市式	27.00	1	7-10	104②	裏面剥落
11	余市式	26.86	1	7-11	101	底部近く, 器厚2.0~3.0cm
12	余市式?	—	9		126⑥	細片
計			39			

表3 包含層出土土器

No.	分類	出土地点	点数	図番号	遺物番号	備考
1	網文式	ST280L5	1	8-1	134⑫	条の太さ0.7cm, 色調褐色
2	網文式	ST300C	1	8-2	136⑧	条の太さ0.4cm, 色調暗~黒褐色
3	網文式	ST300C	1	8-3	136⑧	条の太さ0.4cm, 色調灰~赤褐色
4	網文式	ST300C	1	8-4	134⑩	条の太さ0.4cm, 色調黄褐色
5	網文式	ST280R10	1	8-5	133	条の太さ0.4cm, 色調赤褐色
6	網文式	ST280L5	1	8-6	134⑫	条の太さ0.4cm, 色調赤褐色
7	網文式	ST300C	2	8-7	136⑧	接合、条の太さ0.4cm, 色調赤褐色
					136⑩	
8	網文式	ST300C	1	8-8	134⑩	条の太さ0.3cm, 色調黄~赤褐色
9	網文式	ST300C	1	8-9	134⑩	条の太さ0.6cm, 色調黄褐色
10	網文式	ST300C	1		134⑩	条の太さ0.4cm, 色調黄褐色、表面剥落
11	網文式	ST300C	1		134⑩	表面剥落
12	網文式	ST300C	1		134⑩	条の太さ0.4cm, 色調灰褐色
13	余市式	ST300C	1	8-10	134⑩	色調赤褐色
14	大洞B式併行	ST160L10	1	8-11	127①	色調黒褐色, 黒色有機物付着
計			15			

われる。外面が赤褐色, 内面が灰~暗褐色を呈し, 繊維含有量は2~4ほどではない。7・8は底部に近い破片で, 下位は無文になっている。器厚は7の上端が0.9cm, 下端が2cmである。8の下位外面には黒色の有機物が付着している。9は外面が黄褐色, 内面が灰~暗褐色を呈す。条の太さは0.6cm, 器厚は1.4~1.7cmである。

10は胎土に黒雲母と小礫を含む余市式土器である。器厚は1.2~1.4cmで内面はみがかれていない。

11はST160L10付近で出土した大洞B式併行の土器で, 今回の調査で唯一の縄文時代晩期資料である。器厚が0.3~0.4cmと薄手で, 内外面とも暗~黒褐色を呈する。RLの横回転縄文が施された後に部分的にすり消され, 横方向の長さ1cmほどの刻線が2段施されている。内面は良くみがかれており, 胎土には黒雲母と小礫を含む。

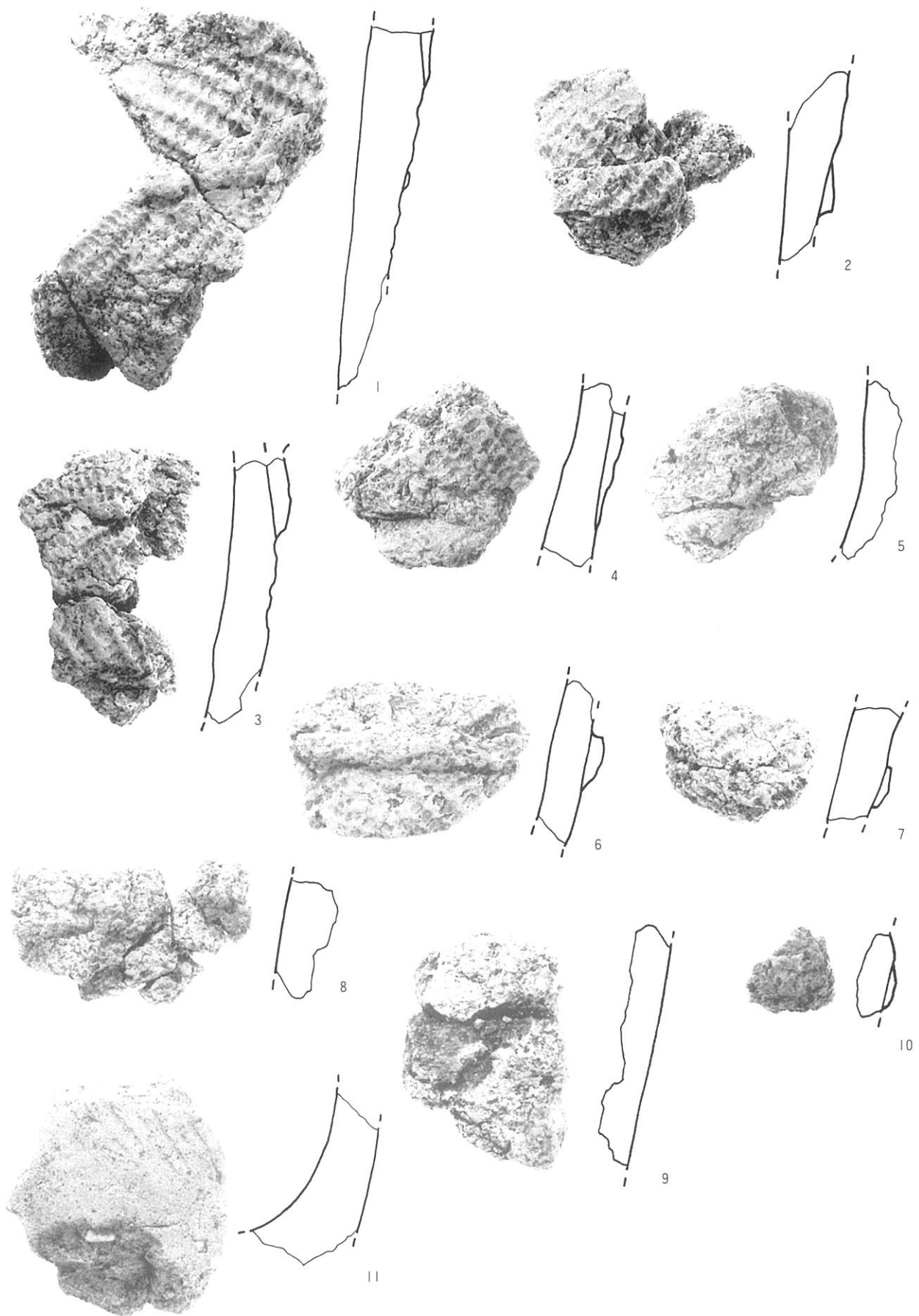


图7 竖穴住居跡石組炉内出土土器

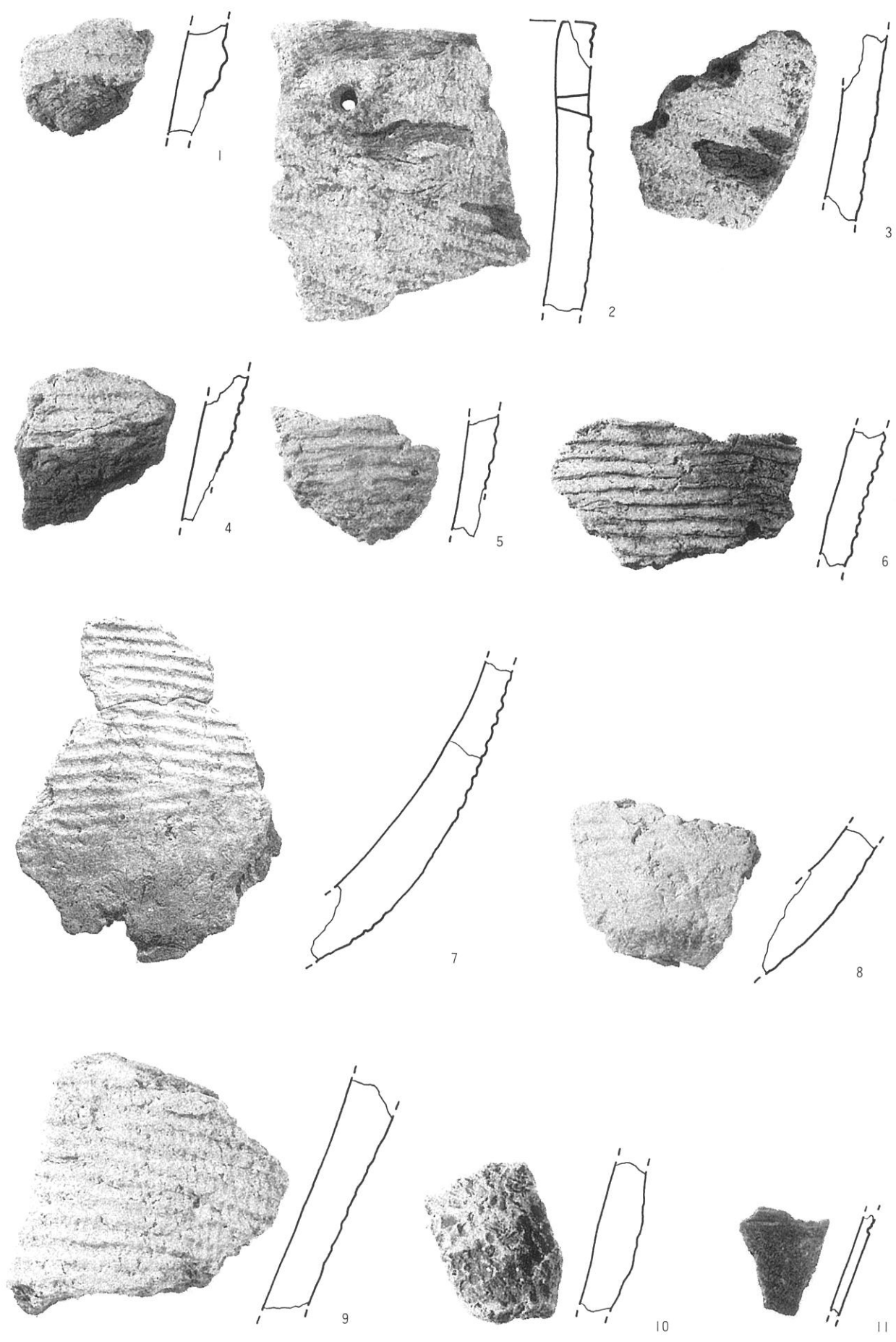


图8 包含層出土土器

2) 石器類 (表4～8, 図9～12)

石材は全て肉眼による判断である。硬質砂岩、凝灰岩、チャートとしたものは、みえる破断面の粒子や組成によって分類しているが、表面は極めてよく似ているものもあり、当時の人にとっては同じ石という意識で持ち込まれたものと思われる。以下、出土地点別に記す。

竪穴住居跡石組炉内

礫石器類のみ81点が残されており、接合の結果19点に集約された。接合はしないが同一母岩とみなされるものをまとめると個体数は15である。うち9個体が焼けており、9個体に黒色有機物が付着している。

表4の1は周縁に敲打痕がみられるたたき石片で、図の下側破断面にも敲打によるつぶれが及んでいることから、下端はこの形でたたき石として用いられている。炉の縁に置かれており、破断面に黒色有機物(図9-1の斜線部)が付着している。

2(図9-2)は非常に粒子の細かい砂岩を素材とした砥石である。2面に使用痕が認められる。なお、遺物番号126は炉内の小片を一括して取り上げたものである。

3(図9-3)・4(図10-4)は炉の縁に分割して置かれていた台石片が接合したものである。素材は3は熔結凝灰岩、4が安山岩である。いずれも両面が平らにみがかれ、破断面に黒色有機物が付着している。4は焼けて赤化している。

5は縁に置かれていた破片(写真図版の下側)と、炉の真中に置かれていた3分の2ほどが接合している(図5参照)。凝灰岩素材で一面が平らにみがかれた台石で、黒色有機物が付着している。大きさは24×21×12cmで、重量は約8kgある。

6は炉の中央底から出土した硬質砂岩の礫で、焼け弾けて剥がれたものが接合しているが、遺物番号123とした破片(写真図版参照)が特に焼けて赤化している。遺物番号122の破片に黒色有機物が付着している。

7～9は礫片である。7は粗粒砂岩で、取り上げ時点から崩壊が激しく使用痕等は不明である。8・9は凝灰岩で、8は5と同一個体の可能性があるが焼け崩れが激しく詳細不明である。9は黒色有機物が付着し、破断面は摩耗している。

10～13は黒色有機物が付着している礫である。10(図10-5)は硬質、11は珪質の砂岩で、12・13は凝灰岩である。12(図10-6)は半分に分かれたものが接合した。13は焼け弾けて剥がれたものが接合しているが、破片は風倒の盛り上がり部分からも出土(遺物番号86・124⑨)、124は風倒盛り上がりの小片一括)している。

14～19は礫片である。14・17・19は珪質の凝灰岩片で、同一母岩と思われる。14は床面直上出土の破片(遺物番号7)と接合している。15は5と同一母岩と思われる。16は泥岩片で同一母岩の礫片が覆土の上位から出土している(表7-13)。18は細粒砂岩で2と同一母岩の可能性はある。

床面直上

45点あり、このうち19点(13個体分)を焼けた礫片が占める。出土地点は中央より南側が多く、北側は剥片石器類ばかり7点である。

表5-1～5(図11上段1～5)は黒耀石製剥片石器類である。1は有柄凸基の石鏃で、側縁部のつぶれが目立つ。2は柳葉形鏃もしくは石錐の未製品。腹面は未調整でねじれている。3はねじれた柳葉形鏃で、側縁のつぶれが顕著である。4は身が湾曲し中央部が尖って張り出す尖頭器で、銚先と思われる。5は尖頭器か削器の端部片。

6は側縁部、7は刃部の石斧片である。

8・9は砂岩の砥石で、炉の脇から並んで出土している。砂粒は8の方が粗い。どちらも取り上げ時点で崩壊し、現在は若干の固まりと砂になっている。

10～12と20は南側でまとまって出土している。10は(図11上段6)は硬質砂岩の砥石で、全体に使用面が及んでいる。11(図11上段7)はシルト岩素材の石板である。縁辺部を敲打及びすり調整で尖らせているが、すり石としての使用痕は認められない。12は5.1×3.3×2.2cmの白色メノウ質の直角礫である。20は焼けた凝灰岩礫片で黒色有機物が付着している。

13・14は凝灰岩大型礫で、13は焼けた端部片。14は3カ所から出土した破片が接合している。

15～27は焼けた礫片である。15・20・25は凝灰岩で同一母岩の可能性はある。15は炉の南側東西に分かれて出土した破片が接合している。16は小礫を含む粗粒砂岩で、風倒盛り上がり出土の表6-9と同一母岩と思われる。17は炉内出土の表4-14・17・19と同一母岩の可能性ある珩質の凝灰岩。18・21・23・27は同一母岩のチャート。19は珩質の砂岩で、床面直上出土の2点とST280Cの包含層(遺物番号128①)出土礫片が接合し、遺物番号53に黒色有機物が付着している。24も同一母岩と思われ、試掘トレンチ(遺物番号134⑩)から出土した破片と接合している。22は硬質砂岩。26はチャートで、風倒盛り上がり出土の2点(遺物番号88・124⑥)と接合し9.0×6.8×5.4cmの楕円礫にほぼ復元できた。28～36は黒耀石の剝片。28・29・32・33は花十勝、30・31は円礫の礫皮片、34・35は真黒な素材、36は流紋岩球顆多い原石である。

37は床面南端から出土した広葉樹環孔の炭化材である。5.0×1.5×0.5cmほどの板状を呈していた。

風倒盛上・落込

風倒木に起因する床面中央の盛り上がり及び落ち込み内からは25点が出土している。

表6-1は覆土出土の破片(図10下段-1の上側)と接合した硬質砂岩の砥石で、一面にくぼんだ敲打痕も認められる。

2～11は焼けた礫類である。2・3・6・11は楕円礫の端部片で、2・6・11はチャート、3は凝灰岩。4は13.5×8.7×3.8cmの洋梨形を呈する礫である。表面はチャートに似ているが重量が770gと重い。5は凝灰岩の楕円礫(6.7×4.8×2.5cm)で、一面に円形に黒色有機物が付着している(写真図版2参照)。7・8はそれぞれチャートの方割礫3点が接合し、楕円礫の3分の2ほどに復元できた。10は3と同質の凝灰岩。12・13は黒耀石の剝片で、12は流紋岩球顆の多い原石、13はそれぞれ円礫と板状原石の礫皮片。

覆土

43点出土している。床面直上の遺物出土状況と同様に北側は少ない。

表7-1～4(図11下段-1～4)は黒耀石製の石鏃である。1は有柄凸基で側縁はつぶれている。2は未製品。3は無柄凹基の一端(図の左側)が欠損したため再調整をしている。4は流紋岩球顆の多い原石を素材とし菱形を呈するが、調整剝離が浅く習作的である。

5(図11下段-5)は、湾曲した剝片の先端に刃部を作出した搔器である。

6(図11下段-6)は、灰色頁岩製の簡単な造りのつまみ付き削器で、図の右側縁には全く調整が施されていない。

7・8(図11下段-7・8)は調整加工のある剝片(Retouchd・Flake)で、ともに摩耗した円礫皮片を素材としている。

9(図11下段-9)は緑泥岩素材の両刃石斧で、使用による刃部の摩耗と線状痕が顕著である。側

縁には敲打痕が顕著にみられ、たたき石としても使用されたことがわかる。

10 (図11下段-10) は硬質砂岩のたたき石である。図の上側は包含層のST300C (遺物番号136④) 出土で端部に敲打痕が、図の下側は側縁部に敲打痕がみられる。

11~30は礫類である。14と19~23, 25~30は焼けている。11・15・21・27・29は硬質砂岩の方割礫で、27はST280R 5の包含層出土破片 (遺物番号132) と接合している。12・16はメノウ化した部分を含む円礫で、12はチャート、16は凝灰岩。13は炉内出土の泥岩 (表4-16) と同一母岩の礫片。14・20は凝灰岩の扁平楕円礫で、全体に焼けて赤化している。20は2.5mほど離れた地点から出土した半分ずつの破片が接合している。17は泥岩の三角礫。18は熔結凝灰岩の軽石。19・23・28は凝灰岩の大型礫片で、23には黒色有機物が付着している。22・24は硬質砂岩の礫片。25・26は凝灰岩の礫片。

No. 27はST280R 5出土の焼け礫片と接合している。30はチャートの礫片である。

31~39は黒耀石の剥片である。31・32・35・39が流紋岩球顆を含み、それ以外は真黒な原石である。35・36は円礫皮片である。

包含層

37点出土している。出土地点はSP160・165から8点、SP220センターから1点で、残りはST280・300周辺である。

表8-1 (図12-1) は真黒な黒耀石が素材で、図の左側縁に刃こぼれ状の使用痕がみられる剥片 (Utilized Flake)。先端が欠損し、背面には白濁した曇りがみられる。

2 (図12-2) は緑泥岩素材の両刃石斧である。覆土出土の石斧 (図11-9) 同様側縁に敲打痕がみられ、特に基部の図左側は敲打によるつぶれが顕著である。

3 (図12-3) は緑泥岩のすり切り残片である。図の右上に両面からのすり切り痕が残っている。

4・5 (図12-4・5) は断面三角形を呈するすり石である。4は硬質砂岩で焼けている。図の下辺を敲打調整後に使用している。5は珪質凝灰岩の二辺をそのまま使用し、他の一辺と端部及び面部はたたき石として使用されている。

6はたたき石で、半割した硬質砂岩の端部を使用している。

7・9・10・13~16は礫 (9・10・13・16は写真図版参照)。7は硬質砂岩の扁平長楕円礫。9は赤色チャートの原石で、19.5×13.3×7.5cm, 2,980gの重量がある。遺跡内でこの大きさのチャート原石が手つかずで残されているのは珍しいことと思われる。10は凝灰岩の長楕円礫で、一面に帯状の焼け跡が残されている。13は緑泥岩の扁平礫で、13.0×9.0×3.0cm, 580gあり、石斧の素材として持ち込まれたものであろう。14・15は凝灰岩で、14は扁平楕円礫、15は楕円。16は珪岩の垂角礫。

8 (図12-6) は灰青色の珪岩円礫で、メノウ質の白色縞を含む。両面から錐による穿孔が試みられている (図12の原寸写真参照) が、硬度と厚さのせいでか途中で断念されたようである。

11は (写真図版参照) 厚さ4cmの板状礫片である。細粒砂岩素材で、一面がみががかれている。

12は硬質砂岩の方割礫。

17~22は礫片。17は焼けた凝灰岩の大型礫片4点のうち3点が接合した。18は凝灰岩片1点とチャート片2点を一括で取り上げている。19は焼けた凝灰岩片。20はチャート片3点と硬質砂岩の端部片1点。21は硬質砂岩片。22はチャート片3点である。

23・24は真黒な黒耀石の剥片。

表4 石組炉内出土石器類

No.	分類	標高(m)	点数	図番号	遺物番号
1	たたき石片	26.94	1	9-1	98
2	砥石	26.90	2	9-2	93
		-	1		126①
3	台石片	26.95	1	9-3	90
		26.90	1		95
4	台石片	26.88	7	10-4	100
		26.86	1		109
		26.86	1		111
5	台石	26.90	1		97
		26.86	2		110
6	扁平長楕円礫	26.88	2		122
		26.80	4		123
7	礫片	-	10		117
8	焼け礫片	26.94	26		102
9	焼け礫片	26.90	1		105
10	焼け楕円礫	26.90	1	10-5	107
11	焼け楕円礫	26.87	1		114
12	扁平長楕円礫	26.99	1	10-6	89
		26.93	1		91
13	長楕円礫	26.88	1		96
		26.90	2		120
		26.90	1		121
		-	2		126②
		27.01	1		86
		-	1		124⑨
14	礫片	27.07	1		7
		26.93	1		92
		-	1		126④
15	礫片	26.91	1		113
16	礫片	26.86	3		115
17	礫片	26.88	1		119
18	礫片	-	1		126③
19	礫片	-	1		126⑤
計			83		

表6 風倒盛上・落込出土石器類

No.	分類	標高(m)	点数	図番号	遺物番号
1	砥石	-	1	10-1	124①
		27.18	1		59
2	焼け方割礫	27.03	1		68
3	焼け方割礫	27.06	1		74
4	焼け扁平礫	27.18	1		76
5	焼け楕円礫	-	2		124④
6	方割礫	27.01	1		67
7	礫片	26.09	1		9②
		27.21	1		31
		-	1		124⑦
8	礫片	27.03	1		9①
		27.03	1		87
		-	1		124⑧
9	礫片	-	1		124②
10	礫片	-	3		124③
11	礫片	-	1		124⑤
12	剥片	27.19	1		69
13	剥片	-	2		124⑩
計			22		

表5 床面直上出土石器類

No.	分類	標高(m)	点数	図番号	遺物番号
1	石鏃	27.00	1	11上-1	16
2	石鏃	27.28	1	11上-2	18
3	石鏃	27.14	1	11上-3	27
4	銛先	26.93	1	11上-4	22
5	R・F	27.33	1	11上-5	14
6	石斧片	27.00	1		21
7	石斧片	26.95	1		24
8	砥石	27.07	1		12
9	砥石	27.07	1		13
10	砥石	26.85	1	11上-6	49
11	石板	26.90	1	11上-7	48
12	礫	26.87	1		47
13	方割礫	27.10	1		8
14	方割礫	27.08	1		36
		27.11	1		43
		26.88	1		51
15	礫片	27.07	1		11
		26.90	1		23
16	礫片	26.97	1		15
17	礫片	26.81	1		44
18	礫片	26.85	1		45
19	礫片	26.89	1		46
		27.09	1		53
		-	1		128①
20	礫片	26.87	1		50
21	礫片	26.98	1		77
22	礫片	27.05	3		82
23	礫片	26.97	1		83
24	礫片	26.93	1		84
		-	3		134⑩
25	礫片	26.94	3		85
26	礫片	27.16	1		72①
		27.05	1		88
		-	1		124⑥
27	礫片	27.16	1		72②
28	剥片	27.02	1		5
29	剥片	27.33	1		10
30	剥片	27.28	1		17
31	剥片	27.01	1		19
32	剥片	26.94	1		25
33	剥片	26.95	1		26
34	剥片	27.27	1		29
35	剥片	27.00	1		33
36	剥片	27.24	1		37
37	炭化材	27.01	1		79
計			51		

表7 覆土出土石器類

No.	分類	標高(m)	点数	図番号	遺物番号
1	石鏃	27.20	1	11下-1	30
2	石鏃	27.24	1	11下-2	35
3	石鏃	27.57	1	11下-3	63
4	石鏃	27.06	1	11下-4	1①
5	搔器	27.23	1	11下-5	6①
6	つまみ付削器	27.39	1	11下-6	52
7	R・F	27.31	1	11下-7	3①
8	R・F	27.30	1	11下-8	41
9	石斧	27.28	1	11下-9	42
10	たたき石	27.31	1	11下-10	40
		—	1		136④
11	焼け礫	27.27	1		70
12	礫	27.03	1		32
13	礫	27.51	1		4
14	礫	27.25	1		55
15	礫	27.29	1		58
16	礫	27.29	1		62
17	礫	—	1		125
18	軽石	27.40	1		54
19	礫片	27.37	1		2
		—	1		134⑦
20	礫片	27.16	1		20
		27.30	1		61
21	礫片	27.31	2		34
22	礫片	27.46	1		38
23	礫片	27.31	1		39
24	礫片	27.27	1		57
25	礫片	27.46	1		64
26	礫片	27.24	1		65
27	礫片	27.37	1		66
	礫片	—	1		132
28	礫片	27.28	1		71
29	礫片	27.38	1		78
30	礫片	27.39	1		80
31	剥片	27.06	1		1②
32	剥片	27.31	1		3②
33	剥片	27.31	1		3③
34	剥片	27.23	1		6②
35	剥片	27.45	1		28
36	剥片	27.25	1		56
37	剥片	27.21	1		60
38	剥片	27.24	1		73
39	剥片	27.49	1		81
計			44		

表8 包含層出土石器類

No.	分類	標高(m)	点数	図番号	遺物番号
1	R・F	ST300C	1	12-1	136⑦
2	石斧	ST300C	1	12-2	136①
3	すり切り残片	ST280L5	1	12-3	134③
4	すり石	ST280L5	1	12-4	134①
5	すり石	ST300C	1	12-5	136②
6	すり石	ST300C	1		136⑥
7	たたき石	ST280L5	1		134④
8	玉未製品	ST260C	1	12-6	131
9	焼け礫	ST160L10	1		127②
10	焼け礫	ST165L10	1		135①
11	板状礫	ST280L5	1		134②
12	方割礫	ST280L5	1		134⑧
13	石斧原石	ST220C	1		130
14	礫	ST280L5	1		134⑤
15	礫	ST300C	1		136③
16	礫	ST300C	1		136⑤
17	礫片	ST300R5	4		129
18	礫片	ST160L10	3		127③
19	礫片	ST280C	1		128②
20	礫片	ST280L5	4		134⑨
21	礫片	ST280L5	1		134⑩
22	礫片	ST165L10	3		135②
23	剥片	ST280L5	1		134⑥
24	剥片	地点不明	1		137②
計			34		

注：75・91は欠番

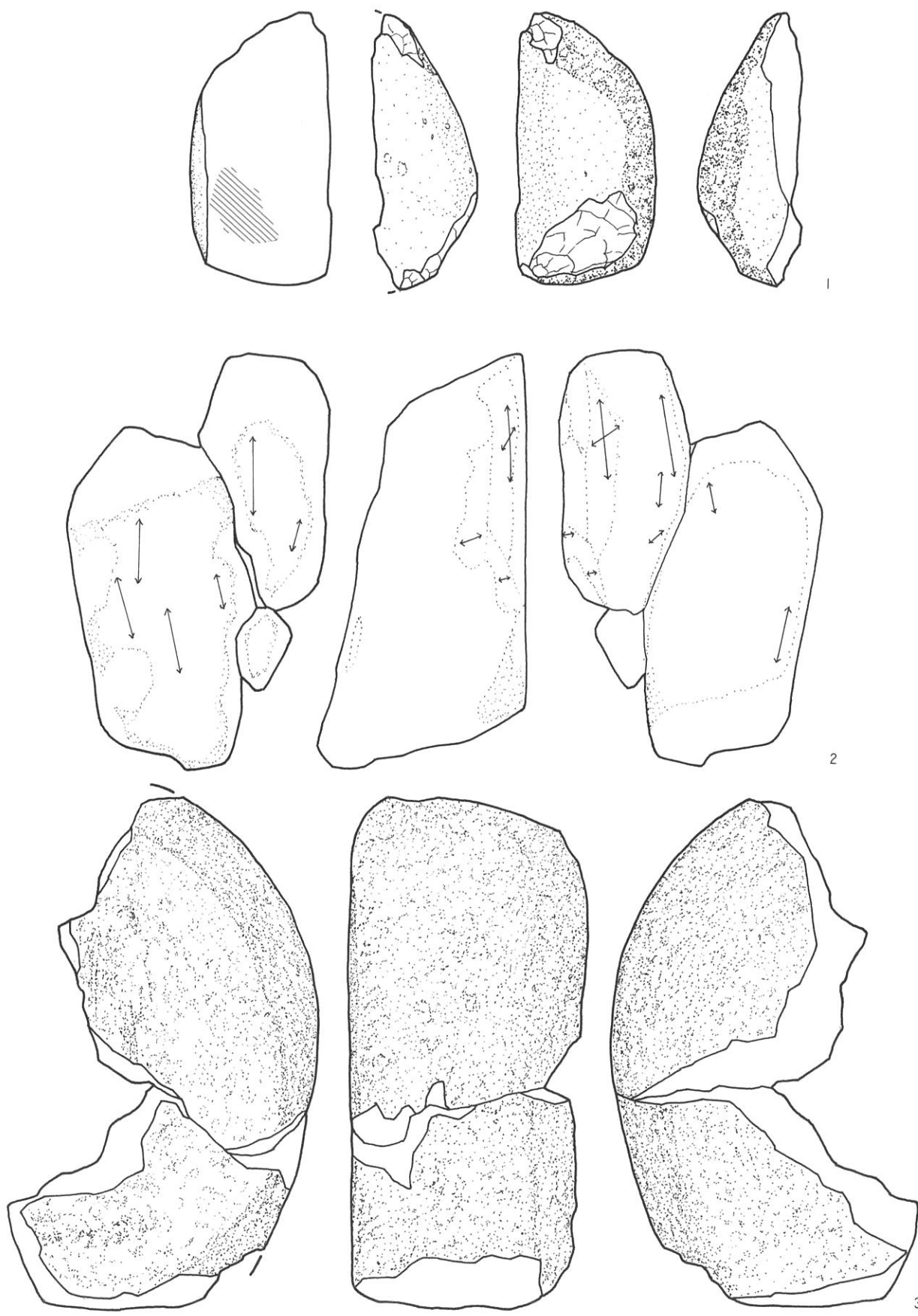


图9 竖穴住居跡石組炉内出土石器類(1)

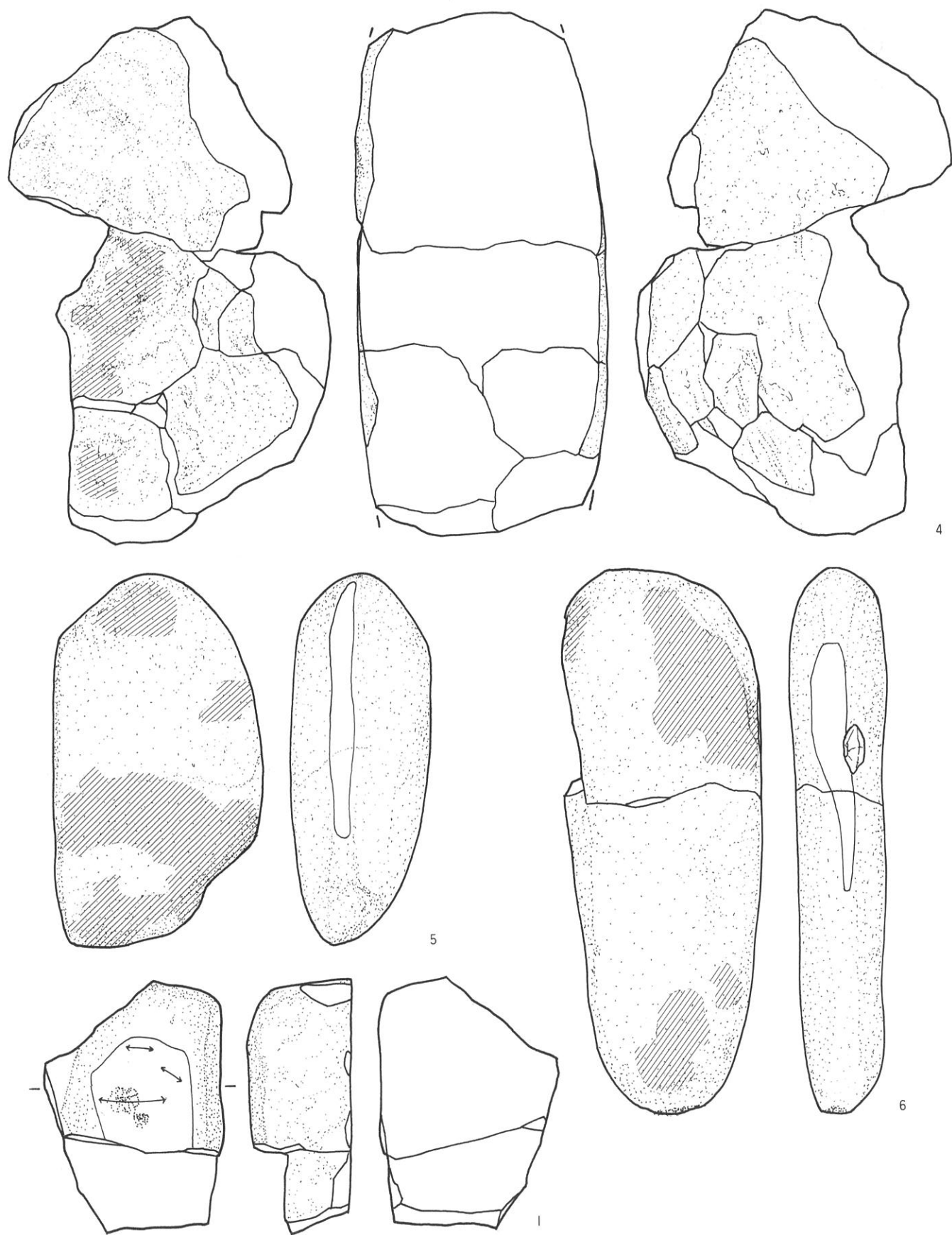


图10 竖穴住居跡石組炉内出土石器類 (2)
 // 風倒落込内出土石器類 (下段1)

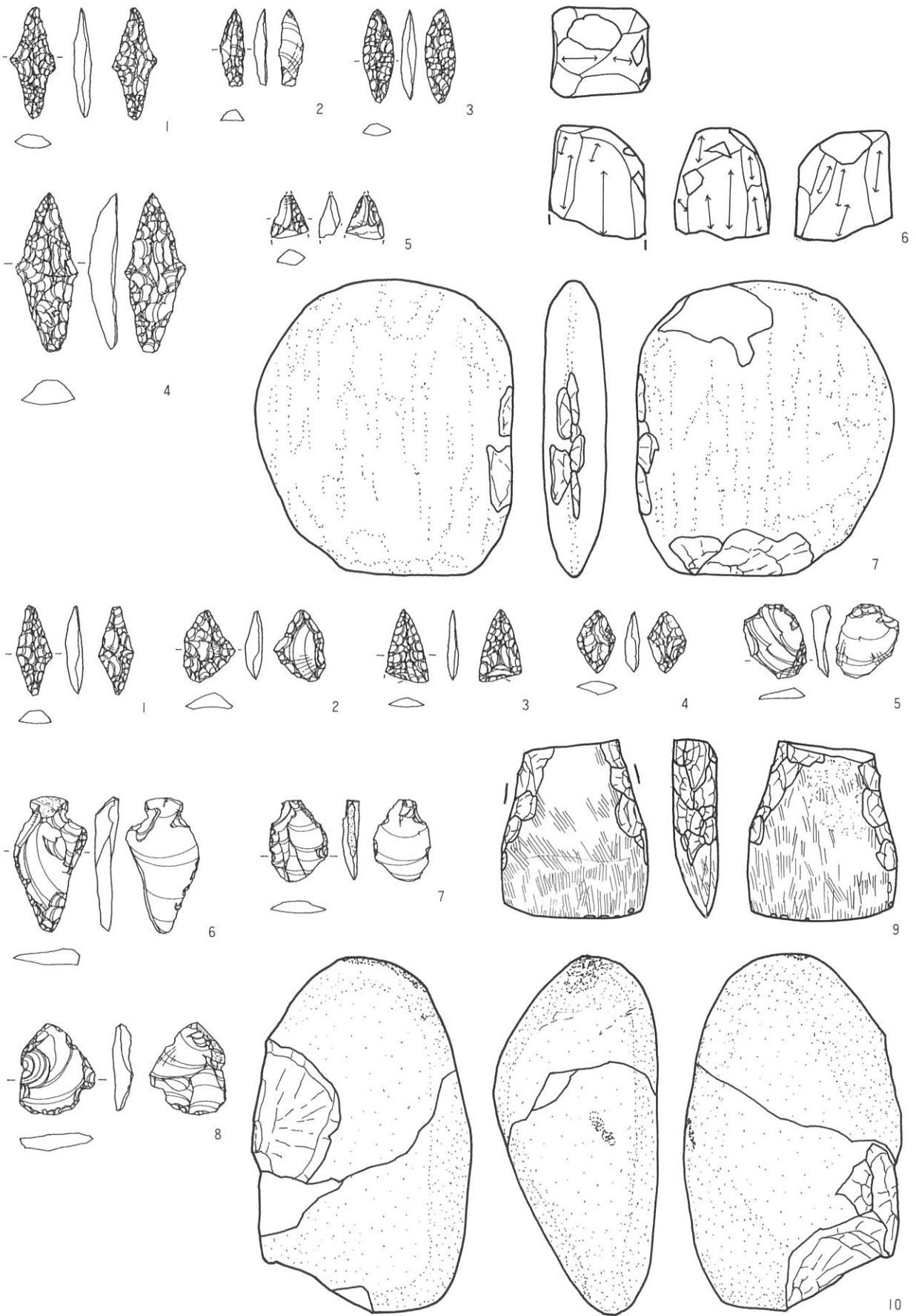


图11 竖穴住居跡床面直上出土石器類 (上段 1~7)
 // 覆土出土石器類 (下段 1~10)

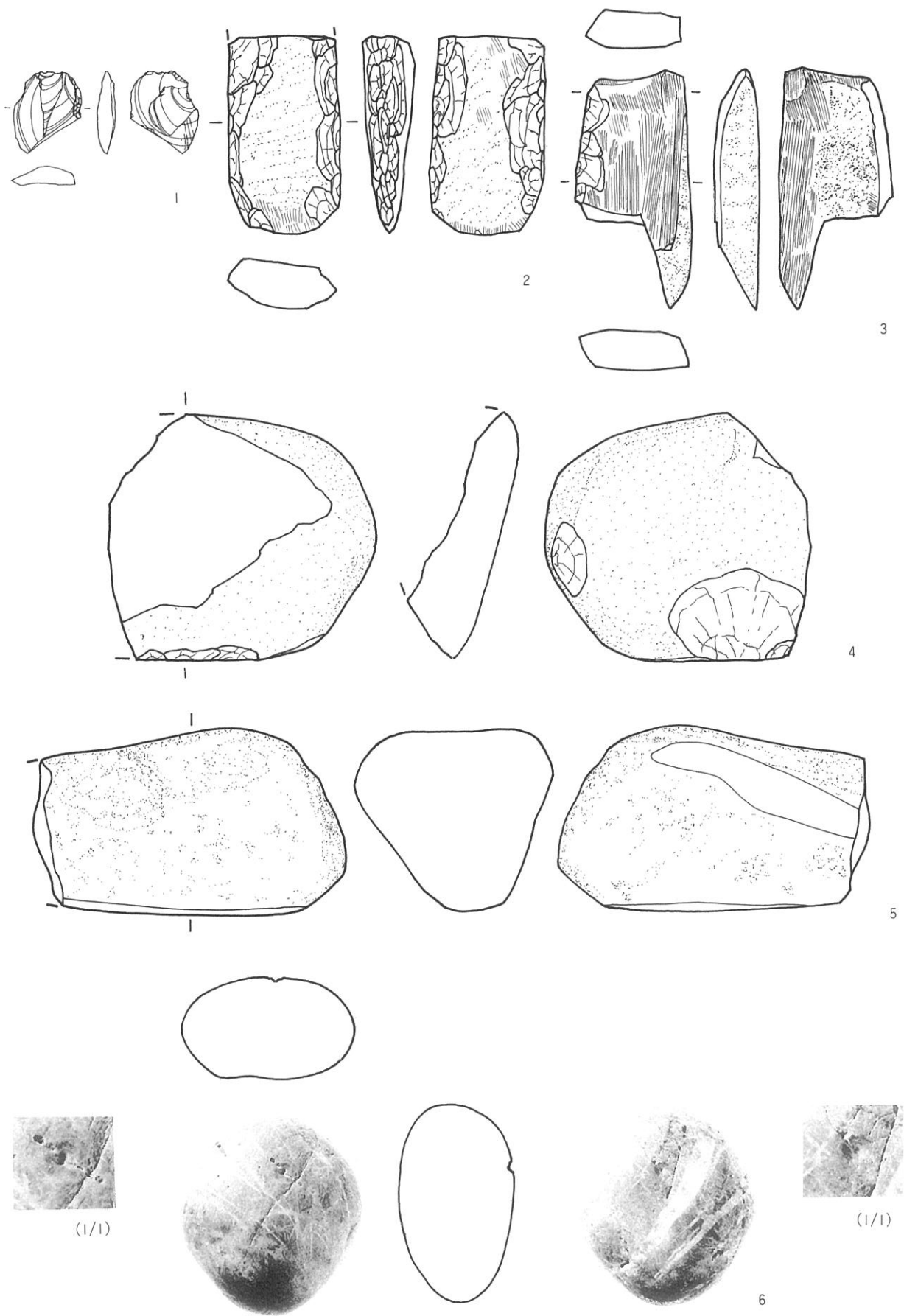
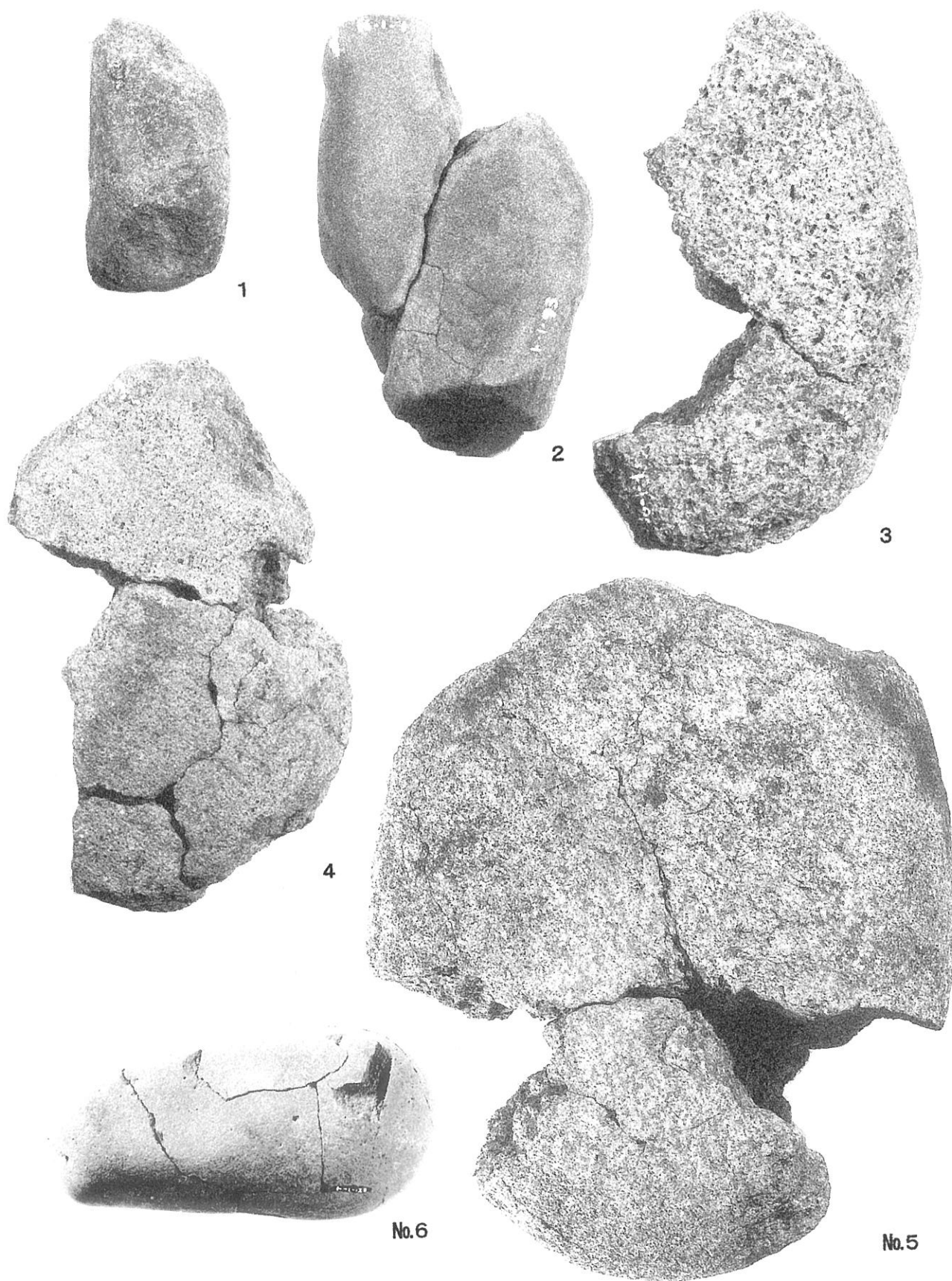


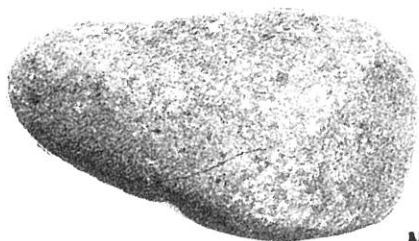
图12 包含層出土石器類

引用・参考文献

- 大沼忠春 1981 「道央部の縄文時代前期土器群の編年について」北海道考古学第17輯
- 佐藤一夫ほか 1983 「静川16遺跡」苫小牧市教育委員会
- 佐藤一夫ほか 1984 「タプコブ」苫小牧市教育委員会・苫小牧市埋蔵文化財センター
- 佐藤一夫ほか 1997 「柏原5遺跡」苫小牧市教育委員会・苫小牧市埋蔵文化財センター
- 乾芳宏・盛昭史 1998 「余市町 大谷地貝塚」余市町教育委員会
- 熊谷仁志ほか 1999 「千歳市 キウス4遺跡(4)A2地区」(財)北海道埋蔵文化財センター
- 大橋毅・北沢実ほか 2000 「芽室町 小林遺跡」-第5次調査報告書-芽室町教育委員会
- 宮夫靖夫 2000 「苫東遺跡群における集落の様相」苫小牧市埋蔵文化財調査センター所報2



竪穴住居跡石組炉内出土石器類 (1)



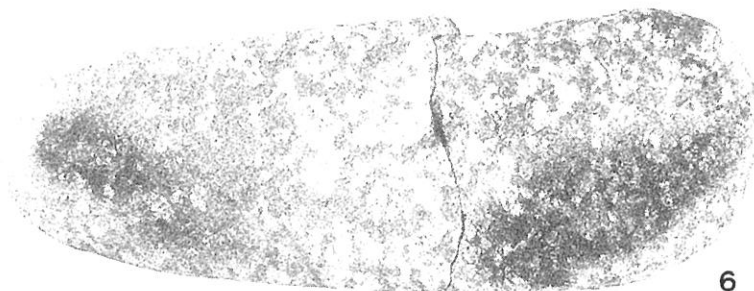
No.9



5

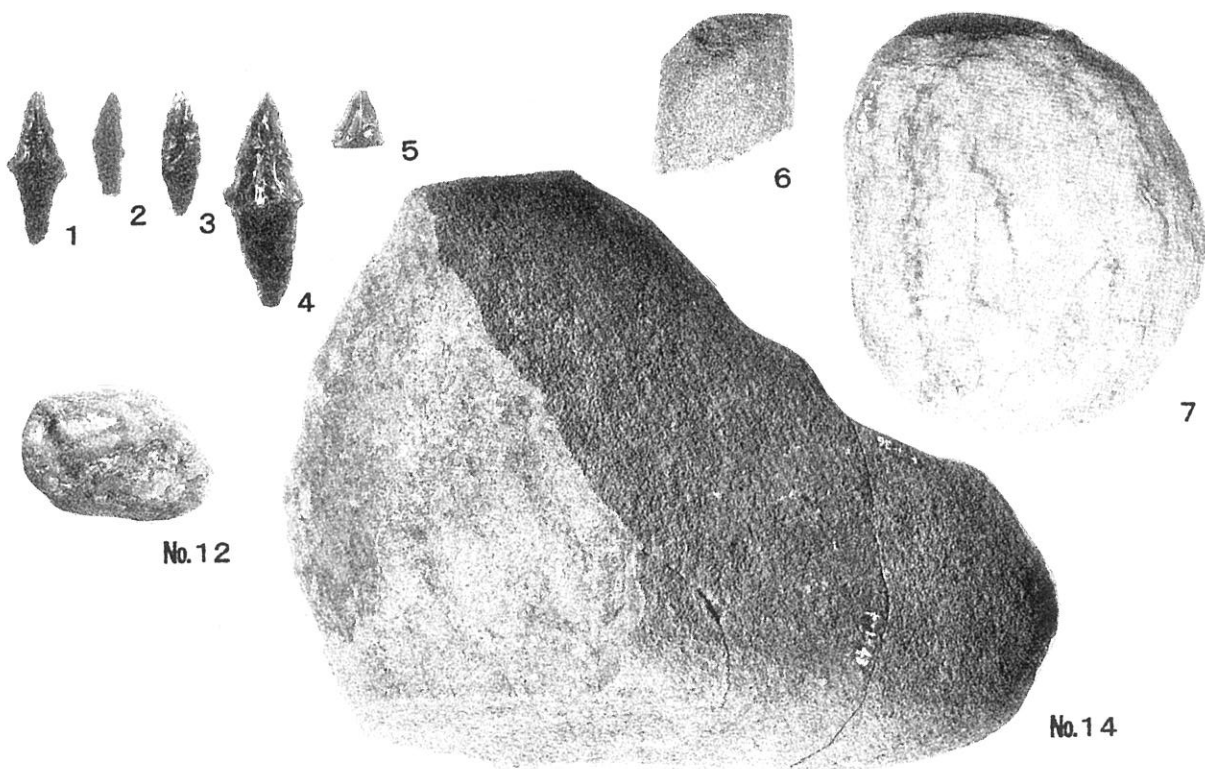


No.11



6

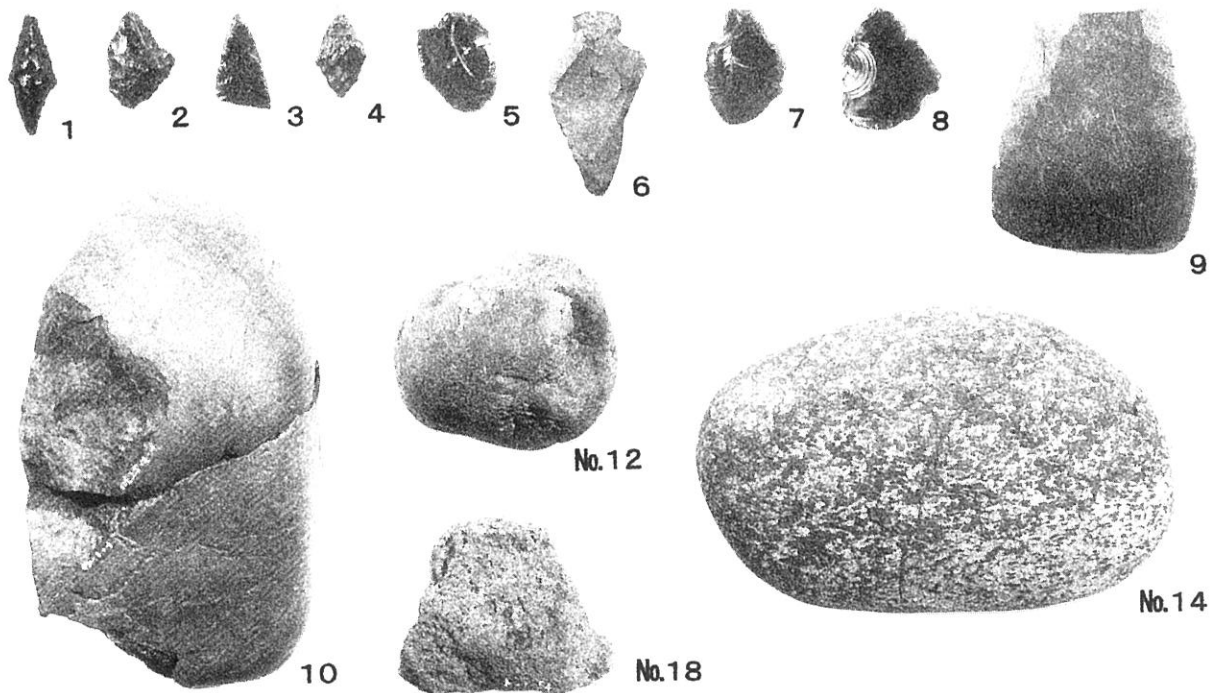
豎穴住居跡石組炉内出土石器類 (2)



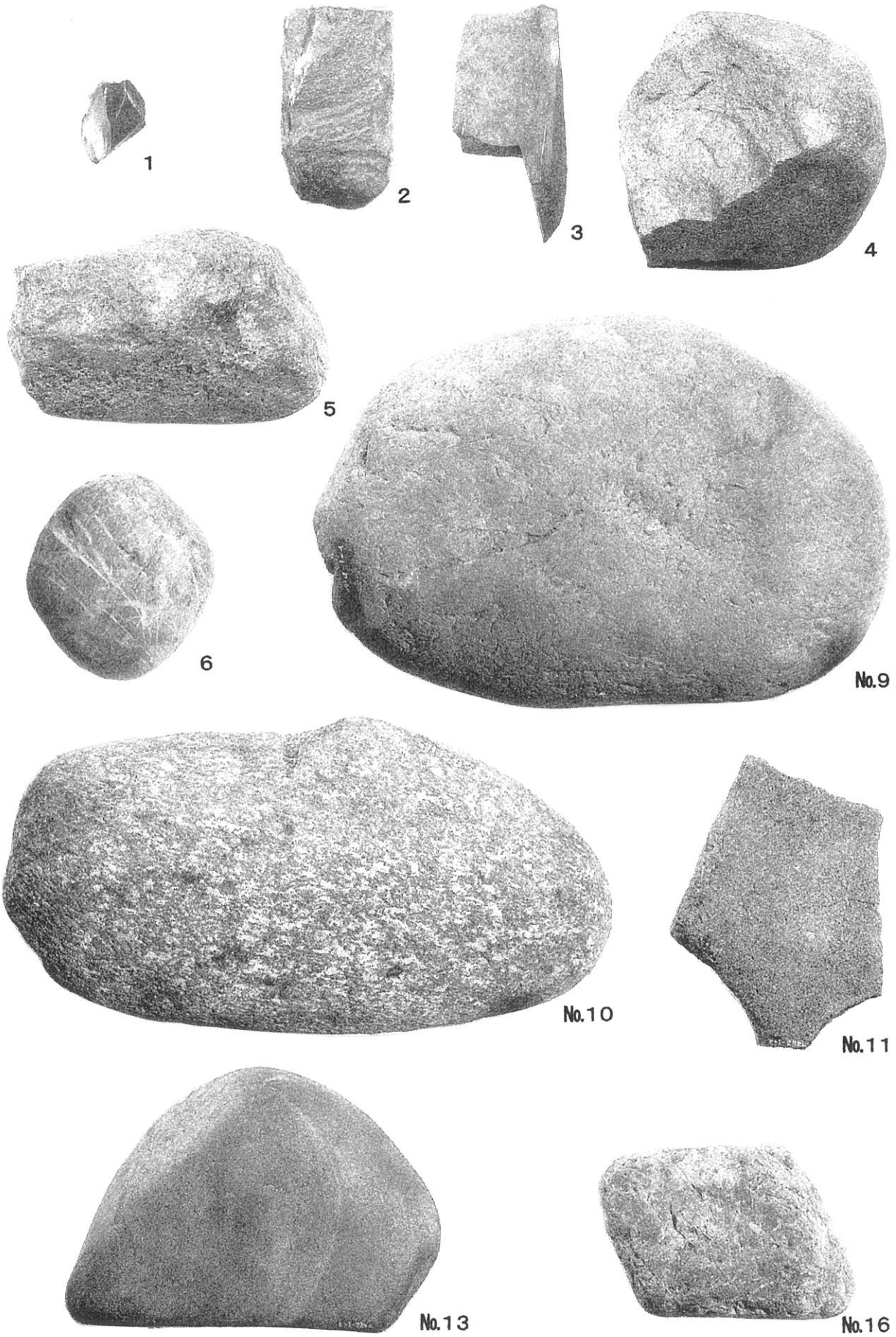
豎穴住居跡床面直上出土石器類



豎穴住居跡風倒盛上・風倒落込内出土石器類



豎穴住居跡覆土出土石器類





中央の木が伐採されている所が調査区（南から）



包含層の調査状況



土壌調査状況



土壌調査状況



(南から)



(東上方から)

土壌完掘状況



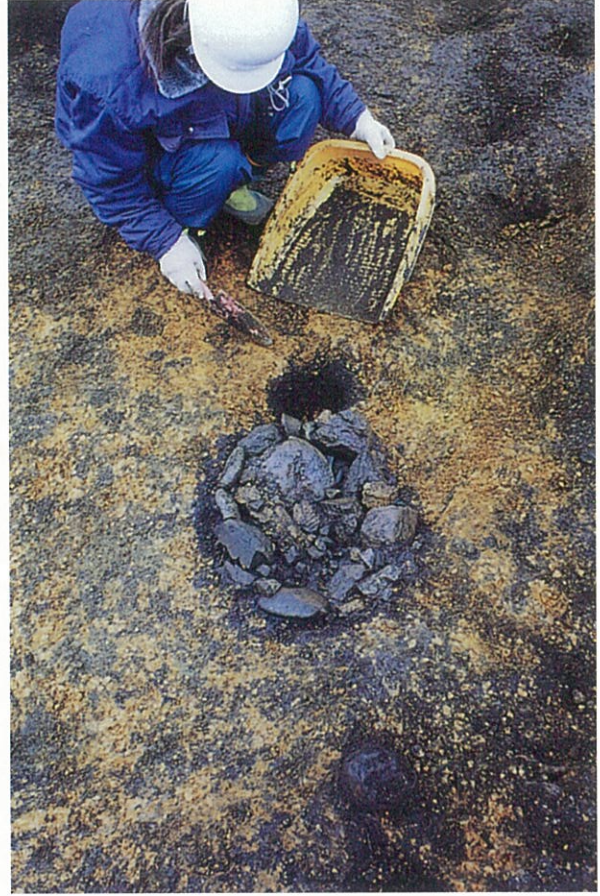
竪穴住居跡上面の樽前c
落込状況



竪穴住居跡調査状況 (1)



竪穴住居跡調査状況 (2)



石組炉調査状況



竪穴住居跡完掘状況

報 告 書 抄 録

ふりがな 書名	とよかわいちいせき 豊川1遺跡		
副書名	ノーザンファームトレーニングコース造成工事立会報告書		
巻次			
編著者名	田才雅彦, 長橋政徳		
編集機関	北海道厚真町教育委員会		
所在地	北海道 勇払郡 厚真町 京町 165番地 1		
発行年月日	西暦2001年3月31日		
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	市町村コード 遺跡番号	北緯 東経
とよかわいち 豊川1	あつまちょう あぎ とよかわ 厚真町 字 豊川 21・23	01581 J-13-71	42° 42' 41" 141° 50' 07"
	調査期間	調査面積	調査原因
	20001030~20001104	6,624m ²	農業関連
	種別	集落跡	
	時代	遺構	遺物
	縄文時代前期 ・後期・晩期	中期の竪穴住居跡1 晩期?の土壇1	前期・後期・晩期の土器・石器

豊川1遺跡

ノーザンファームトレーニングコース
造成工事立会報告書

平成13年3月31日 発行

発行 厚真町教育委員会

〒059-1692 厚真町京町165番地の1
TEL (01452) 7-2321

印刷 北海道図書企画
札幌市西区発寒9条12丁目1-55
TEL (011) 668-1131
